

第8回全国「高校文芸誌(及び文芸創作)」コンクールについて

青春はそうたやすく売りに出さない

選考委員長 村中李衣

今年で第8回目を迎えた全国「高校文芸誌(及び文芸創作)」コンクール。すべての応募作品との出会いを終えた今、審査員一同、大きな感動と心地よい疲労感に包まれています。

今年から、一校一誌のエントリーを徹底したため、全国から寄せられた文芸誌数は60校60誌となりました。作品総数は、3,325作品でした。

ジャンルを問わず、岩手・秋田・宮城と、東北勢の活躍が非常に顕著だったことは、今年のひとつの特徴です。そうした優れた作品群が揉み合い磨きあわれた成果の場所として、文芸誌全体のレベルもおのずと東北勢に、豊かなものも多く見受けられました。ひところは、文芸誌の完成度として、個々人の作品だけでなく、部をあげての活動や企画力が、強く問われていましたが、原点回帰ともいえるのでしょうか、やはり、1作品ごとを力あるものに仕上げていくという姿勢の大切さが、審査員の中でも話題に上りました。

さて、東北優勢と書きましたが、その中であって、やはり粒よりの作品を集め、圧倒的な完成度を誇った福岡県筑紫女学園高校の『いさらみ』第50号が、最優秀賞を獲得されました。2年連続の栄えある最優秀賞受賞の陰には、先輩から後輩に託されてきた「内なることば」の繋ぎ渡しがあられるのでしょうか。優秀奨励賞を受賞された『現想』第5号、『志高文芸』42号、『青窓』75も、いずれ劣らぬバランスの取れた部誌でした。賞にふさわしすぎて(はまりすぎて)破天荒さがみられないのが、残念なくらいでした。

個人作品部門では小説部門で最優秀賞を取られた宙城刻さんの「環状線と花畑の想いで」と加藤晶さんの「夜のクマ」、いずれも、審査員全員一致で推薦されたものです。世界のねじれやくもりを、自分の身体性を武器に、自分の言葉で練りこむように描きこんでいく手法を既に身につけていることに、驚かされました。また、同じく最優秀賞を受賞された錦戸慶太さんの詩「走る」は、若々しくしなやかな言葉たちによって紡がれており、この作者の表現にも、豊かな身体性を感じずにはいられませんでした。

俳句部門では千葉由穂さんの「夕日をとめて」、短歌部門では柴田悠さんの「パラノイア」が技巧と感情のバランスを巧くとった作品として、優秀賞に選ばれました。

全体を眺めなおすと、甘く青いと謳われやすい青春をたやすく売り物にしない、しっかりと「自分を育てる」覚悟のできた作品に出会えたことが今年が一番大きな収穫でした。

来年度から、九州・山口地区の文芸活動のさらなる飛躍を期待して、「九州・山口地域奨励賞」を新たに設けることにしました。

今から、来年の作品群との出会いが楽しみです。

「高校文芸誌」部門

最優秀奨励賞

| 文芸誌名 | 高校名 | 県名 |
|-----------|-----------|-----|
| いさらみ 第50号 | 筑紫女学園高等学校 | 福岡県 |

優秀奨励賞

| | | |
|----------|---------------|-----|
| 現想 第五号 | 福島県立葵高等学校 | 福島県 |
| 志高文芸 42号 | 岩手県立盛岡第四高等学校 | 岩手県 |
| 青窓 75 | 大分県立大分上野丘高等学校 | 大分県 |

佳作

| | | |
|---------|---------------|-----|
| 琢磨 第85号 | 秋田県立秋田高等学校 | 秋田県 |
| 若草 | 星野高等学校 | 埼玉県 |
| 翔る 創刊号 | 福岡県立門司大翔館高等学校 | 福岡県 |
| 紫苑 42号 | 仙台白百合学園高等学校 | 宮城県 |
| 花北文学 51 | 岩手県立花巻北高等学校 | 岩手県 |

梅光学院大学文芸部賞

| | | |
|--------|-------------|-----|
| 蒨 第62号 | 愛媛県立松山南高等学校 | 愛媛県 |
|--------|-------------|-----|

個人作品部門

| 賞 | 分類 | ペンネーム | 作品名 | 県名 | 高校名 | 文芸誌名 |
|-----------------|----|-------|------------------------------------|-----|---------------|--------------------|
| 最優秀作品 下関市長賞 | 小説 | 宙城 刻 | 環状線と花畑の想いで | 宮城 | 宮城県石巻高等学校 | 玉響 |
| 最優秀作品 梅光学院長賞 | 小説 | 加藤 晶 | 夜のクマ | 宮城 | 仙台白百合学園高等学校 | 紫苑 42号 |
| 最優秀作品 佐藤泰正賞 | 詩 | 錦戸慶太 | 走る | 福岡 | 福岡県立門司大翔館高等学校 | 翔る 創刊号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 小説 | 植田富栄 | 朱の向こうへ | 岩手 | 岩手県立盛岡第四高等学校 | 志高文芸 42号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 小説 | 迷夢鳥 | 穀雨郎狐 | 山口 | 山口県立防府高等学校 | RESEDA 54 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 小説 | 後藤 綾 | モルタルの夜 | 宮城 | 仙台白百合学園高等学校 | 紫苑 42号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 小説 | 佐野結菜 | 白いクレヨン | 岩手 | 岩手県立花巻北高等学校 | 花北文学 51 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 小説 | 福丸みお | 空き巣と子供 | 福岡 | 筑紫女学園高等学校 | いさらみ 第50号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 詩 | 古川仁美 | 地上まで | 福岡 | 筑紫女学園高等学校 | いさらみ 第50号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 詩 | 後藤 綾 | 林檎 | 宮城 | 仙台白百合学園高等学校 | 紫苑 42号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 詩 | 嘉井 | 金平糖ブルー | 岐阜 | 岐阜県立大垣北高等学校 | 暁月夜 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 俳句 | 千葉由穂 | 夕日をとめて | 宮城 | 仙台白百合学園高等学校 | 紫苑 42号 |
| 優秀作品 同窓会賞 | 短歌 | 柴田 悠 | パラノイア | 秋田 | 秋田県立秋田高等学校 | 琢磨 第85号 |
| 佳作 | 小説 | 我六 | 思ひ | 宮崎 | 宮崎県立門川高等学校 | 文章工房 |
| 佳作 | 小説 | 垣花佳恵 | やさしい悪魔 | 宮城 | 仙台白百合学園高等学校 | 紫苑 42号 |
| 佳作 | 小説 | 野田真紀子 | 茶と柿 | 福岡 | 筑紫女学園高等学校 | いさらみ 第50号 |
| 佳作 | 小説 | 池松果実 | 春待月 | 大分 | 大分県立大分上野丘高等学校 | 青窓 75 |
| 佳作 | 小説 | 阿部卓也 | ワスレナグサ | 大分 | 大分県立大分上野丘高等学校 | 青窓 75 |
| 佳作 | 小説 | 碧璃 | 桜のおまじない | 広島 | 広島県立広島観音高等学校 | 海溝 79号 |
| 佳作 | 小説 | 酒名 葵 | 寂しがり | 山口 | 山口県立大津高等学校 | 息吹 第91号(2008 仲冬号) |
| 佳作 | 詩 | 宙城 刻 | 午前零時について | 宮城 | 宮城県石巻高等学校 | 玉響 |
| 佳作 | 詩 | 小武明日香 | 水の月 | 福島 | 福島県立磐城高等学校 | 磐高文学 第六十五号 |
| 佳作 | 詩 | 北川佳奈 | エントランスとグジットの中点 | 埼玉 | 星野高等学校 | 若草 |
| 佳作 | 詩 | 三宅麻由 | 駈けるもの | 茨城 | 茨城県立水戸第二高等学校 | 瑞木 63 |
| 佳作 | 詩 | 襟篠 梓 | メインピースのおとしもの | 愛知 | 愛知県立千種高等学校 | パズル |
| 佳作 | 詩 | 松ヶ野 彩 | 瞬き | 福岡 | 福岡県立浮羽究真館高等学校 | 幸 第三号 |
| 佳作 | 俳句 | 加藤 晶 | とんぼうとねこ | 宮城 | 仙台白百合学園高等学校 | 紫苑 42号 |
| 佳作 | 俳句 | 千田朋佳 | 俳句 | 宮城 | 宮城県名取北高等学校 | 漣 復刊第三号 |
| 佳作 | 俳句 | 高橋裕輝 | 夏の瞬寒 | 福島 | 福島県立磐城高等学校 | 磐高文学 第六十五号 |
| 佳作 | 短歌 | 小原 翠 | 真っ赤なりんご | 福岡 | 福岡県立門司大翔館高等学校 | 翔る 創刊号 |
| 佳作 | 短歌 | 小瀬爽流 | 人体模型前集合 | 愛媛 | 愛媛県立今治西高等学校 | 鯨ヶ丘 62 |
| 佳作 | 短歌 | 捺 | かんたん短歌 | 長崎 | 長崎県立対馬高等学校 | 言ノ葉 |
| 佳作 | 評論 | 渡辺雄二 | 「志賀直哉『赤西蠣太』試論」～登場人物 の名前が象徴するもの～ | 神奈川 | 桐光学園中学高等学校 | 桐光学園文芸部誌 第壱 拾弍号 |

村田喜代子(本学教授 作家)

今年もレベルアップ

年々に送られてくる小説のレベルがどんどん上がってくる。若い人の活字離れなんて嘘だ。あなた方はどうしてこんなに根性を入れて、ふてぶてしく、そして自由に、軽々と。小説を書けるのだろう。

宙城刻さんの『環状線と花畑の想いで』は、最初の一行、「今はざっと昔の話さ」で、アッと思った。ひらりと虚構に入っていた。茜色に染まった首都の上空で交差するワイヤー状の環状線を、こんなに硬質の抒情的文章で書かれると、参ってしまう。下町の鬱屈したおとなと、キラキラ光る安物のオモチャや駄菓子欲しさに集まる子供と、得体の知れない「髭婆」という店。高校生の手で過ぎ去った昭和が、こんなふう再現されると奇妙な心地になる。この作者は空気感が描ける。絵でも文章でも、人や物の形はとりあえず描けるが、その闇を埋めている空気を描くことは至難だ。描けなくてもプロの作家になっている人は一杯いる。この小説の主演は空気感なのだ。だからとりたてた事件も起きず物語は閉じられる。と、そう思っていたら結末でまた、アッとなった。「髭婆」という駄菓子屋の正体が明かされる。結末まで言葉が充分伸びきった見事な短編だ。

ただ作中で気になる箇所に、島根県の蚊と蠅のこと、また噛み煙草は日本には定着しなかったこと等、調べ直してほしい。

加藤晶さん『夜のクマ』は昨年も最優秀作に選ばれたが、今年は完成度で圧倒的に勝っている。一行目から筆がスッと入って、余計な文章がなくなった。必要な言葉だけが残った。それが的確に主人公の心を語る。余計な文章がなくなったところで次に、今度は必要な文章をどれだけ増やして豊かにするかどうか。

植田富栄さん『朱の向こうへ』は、仲間の各人が色の持つイメージをもとに、掌篇のフィクションを作り合ったものの一つだ。みんなで湖の岸辺に立って小石をシュッと遠くまで飛ばす。あれに似ている。無理に作ろうとする感じがないので、ふわっとうまく秋田彦という少年神を登場させることができた。フィクションと土地の資料がいい具合に重なって好ましい味が出た。

迷夢鳥さん『穀雨郎狐』は、よくこれだけの長さの夢を紡ぎ終えた。楽しかったか。苦しかったか。両方セットになった満足感が作者を癒しているのではないか。この作品にはなぜか感想よりもお祝いをのべたい。

後藤綾さん『モルタルの夜』は好感の持てる書きぶりだが、このタイトルには首をかしげた。そして、文章はあぶなげないが、ただどうして左官のような、実技を多少とも経験しないと描けないような題材を選んだのだろう。自分がコテを握って感じるものが入っていたら、もっと強い作品になっただろう。

佐野結菜さん『白いクレヨン』は繊細な少女の世界を描いたが淡彩すぎるようだ。人物の輪郭が薄くて淡い絵を見ている印象。福丸みおさん『空き巣と子供』もタイトルに難あり。空き巣と子供をくっつけただけでは、タイトルとはいえない。これは『夜のクマ』にもいえること。タイトルは説明ではない。この作品は書き慣れて構成も縛られているが、肝心の母親も、題材自体も類型的な感じである。筆力は持っているから、自分の心の中に手を差し込んで、そこで掴んだものを書いてほしい。

小林慎也(本学教授 ジャーナリスト)

リアリティーという核

今回の「小説」は、比較的読みやすい作品が多かったように感じた。作品に盛られた世界が読者の持つ現実感覚や想像力と近似していたせいも、あるいは、その二つのバランス感覚が優れているのか。もちろん、選んだ舞台や時代はさまざまだが、作者とつながる道筋が見えやすかった。宙城刻さんの「環状線と花畑の想いで」、加藤晶さんの「夜のクマ」も、植田富栄さんの「朱の向こうへ」も、作者の過去の深部に潜む原体験を想像させて、あるリアリティーを感じさせた。とくに、「環状線」の「駄菓子屋」は子どもが隠し持つ「秘密基地」を濃密な描写で鮮やかに浮かび上がらせていた。

迷夢鳥さんの「穀雨郎狐」などの歴史ものも、読みやすく納得させた。

ただ、ないものねだりをすれば、幾分、若者特有のワイルドさ、破天荒な実験が少なくなり、予定調和の印象も拭えない。

短歌、俳句は、日本の季節感を詠み歌う表現だが、選ぶことばに衝撃が少なかった。もっと、伝統文芸への新鮮な挑戦もほしい。

北川 透(本学特任教授 詩人 文芸評論家)

痛みを堪(こら)えて走ることば

自分だけのことばってないね。共有されなければことばではない。でも、アッ、この人は自分のことばで書いている、と感じられるのは、なぜ？ それはことばの使い方、つまり、ことばを通して考える、あるいは感覚する道筋が、その人固有のものだからでしょう。たとえば詩では、錦戸慶太さんの「走る」。この人独特の痛みを堪えて走ることばから、リズムカルな強い思考を感じました。また、後藤綾さんの「林檎」では、感覚することばの匂うような妖しさが新鮮でした。一方、小説は意味を切断する詩と違って、語り口とか、構成とか、ストーリーとかの要素が大事。しかし、加藤晶さんの「夜のクマ」では、同級の少女やその母親の無神経な振る舞いに恐怖する、わたし のことばに引き込まれました。また、宙城刻さんの「環状線と花畑の想いで」では、髭婆 という少年たちの危険なアジトに、秘密や夢、さまざまな音響や色彩を運んでくる、語りのことばの不思議さに目眩を覚えました。いずれもことばが生きています。

宮崎勝弘(本学教授 ジャーナリスト)

既成を超える問題作を

審査に臨んで毎年思うことだが、新しい感性が横溢する作品に出会いたい、願わくは、既成の観念やこの閉塞時代を突き破るような「問題作」はないかと。残念ながら、そんな挑発に乗る不行き届き者はいなかった。社会の歪みを鋭くとらえ、その実相を普遍化し肉体化する中から発せられる叫び。管理化が進む今の状況では無理な注文なのだろうか。創作・表現は、瞬間芸であるとともに、それだけではないことを知ってほしい。「夜のクマ」は、いやなことを「いやだ」と言えない女の子の心の内が、平易な言葉でしかし的確に、よどみなく描かれている。こうした子どもはいま、少なくない。作者は自分のことも踏まえて書いているのだろうか。「空き巣と子供」は、空き巣に入った泥棒の心理や金品をあさる情景描写がうまく、面白く読ませてくれる。「朱の向こうへ」は地域の奥深さと土の匂いを感じさせる作品、伝承文化を育んだ土壌の中から生まれたとみた。「穀雨郎狐」は文字通りの力作、このほか「環状線と花畑の想いで」「茶と柿」「白いクレヨン」が光った。

鍋島幹夫(本学准教授 詩人)

走らされている、としても

ここ数年と比べ今年度の詩作品から受ける印象はいくぶん違った。息苦しいほどの閉塞感や破壊へと傾く感覚が薄らいできている。というより、はっきり明るさに向かう視線がある。たしかに、「四面すべてが暗闇」、「まっくらな鏡」、「暗がり」という孤独感の表現が最終選考の作品にも見受けられる。「一人」、「ひとり」、「独り」という語も随所に見られる。

しかし、それでも向日性を秘めた身体がある。「誰かが作ってくれた一方通行」(「地上まで」)という一行に見られるように、好むと好まざるに拘わらず余儀なくさせられた現状を走らされているという感覚。それでも「どこかに欠けた五感に希望を見いだそうと」(「走る」)自らを突き動かす生の感覚があり、身体のまっとうな反応がある。頼もしいと思った。

文芸が生きることや人間そのものを見つめる行為である以上、暗さから逃れられないのは当然のこと。しかし、暗さには深さが必要である。その深さを掘り進めるのが言葉の力である。詩の最優秀作品に選ばれた「走る」には、からだで考えている言葉の躍動がある。技術的にうまい作品は他にもある。しかし、技術とは手先のこと。本来、不器用であるからだか、その全体で懸命に言葉を求めて掘り進めている思考行為に説得力がある。

島田裕子(本学教授 上代和歌研究 歌人)

手探りの発見とことば

今回、短歌や俳句は、生活実感を詠んだ質実な歌が多かった。そこから定型詩としていかにオリジナルの詩情を作り上げているか。それが、選者たちの評価の決め手となった。

短歌では、柴田悠さん「パラノイア」の「空虚のウロボロス二首」の独創性と遊び心が面白かった。幾何学的に交錯する句の組み合わせで幾つもの歌に読め、しかもどの歌も内容は薄くない。また、柴田さんには日常に潜む危うさや矛盾を捉え出す力がある。小原翠さん「真っ赤なりんご」は「箱詰め真っ赤なりんご一つ買い世界を包む夕焼けとする」他、生活実感を抒情にまで展げていく伸びやかさがある。俳句では『紫苑』42号の千葉由穂さん「夕日をとめて」、そして加藤晶さん「とんぼうとねこ」が優れていた。それぞれにのどかな間とそこはかたないユーモアがありよかった。また、『青春短歌集 第5集』は高校生らしい素直な短歌が詠まれ好感をもったが、そこからテーマを見つけ群作・連作にまで発展してほしい。

来年も新鮮な詩情に溢れた短歌・俳句を期待している。

加藤邦彦(本学准教授 日本近・現代文学研究)

ワクワクする文芸誌に出会いたい

今年の文芸誌はしっかりした作りのものが多かったように思います。ページ数が多いにもかかわらず 細部まで読みやすさや美しいレイアウトが工夫されている雑誌、全体の構成がよく考えられている雑誌がいくつもありました。ただその一方で、全体的に無難で、こじんまりとまとまっているという印象もありました。それは文芸誌の本義である作品に力を入れている証しでもあるので、必ずしも悪いことではありません。しかし、文芸誌を読んでいるとワクワクするような何かを求めてしまうのも事実です。ぜひ、ワクワクするような文芸誌に出会わせてください。

「いさらゐ」は二年連続、文句なしの最優秀奨励賞です。企画も充実していますが、何よりも作品そのものを充実させようという姿勢を高く評価しました。自分たちの歴史と伝統を確かめ、誇りを持って雑誌作りに励んでいる点もすばらしいと思います。「現想」は丁寧に雑誌が作られている点、作品を大切にしている点を評価しました。「志高文芸」は作家研究などの企画が充実しており、読ませる工夫が随所にみられます。「青窓」は写真の大胆な使い方が印象に残りました。

梅光学院大学文芸部 学生代表

「落」第62号を推薦します

60冊の魅力ある文芸誌を読ませていただきました。去年の先輩方からも、「いろんな意味で衝撃的よ～」と申しわたしがあったのですが、なるほど、一冊を読み終えるたびに、見たことのない会ったことのない同じ志をもつ仲間たちの熱い思いがぐいぐいと胸に迫って来ました。また、「自分たちの文芸誌だ」という誇りのようなものも、強く伝わってきて、「批評しよう」などという高みからの目線が何と傲慢なものであったかを思い知らされました。60冊も読みとおすなんて・・・と想像していた苦痛は、自分たちの文芸誌づくりの原点を問い直す苦悩へとすっかり変わっていました。

小説の文章には、独自の生きたことばが存在し、詩や俳句、短歌には、若いはじけるようなエネルギーとそれが生み出すリズムが、そして、文学散歩などの企画には、仲間と感じ合う一瞬一瞬へのいとおしさが満ちていました。

中でも、今回私たちが選ばせていただいた「落」は読みやすさの点において自然な工夫が施されており、内容も文句なく充実した素晴らしい文芸誌でした。タイトルなども一人一人工夫しており、とてもよい文芸誌でした。いろいろな意味で学ばせていただきました。